２　十勝管内図

大雪山国立公園
阿寒国立公園
旧国鉄士幌線
コンクリートアーチ橋梁群
（至層雲峡）
三国峠
（至北見市）
（至阿寒湖）
▲トムラウシ山
2,141m
▲十勝岳
2,077m
▲ニペソツ山
2,013m
糠平湖
十勝川
然別湖
オンネトー
螺湾ブキ
（足寄町螺湾）
陸別町
足寄町
新得町
上士幌町
鹿追町
（至富良野市）
狩勝峠
士幌町
本別町
（至白糠町）
音更川
利別川
音更町
北海道横断自動車道
モール温泉
（十勝川温泉ほか）
池田町
（至日高町）
日勝峠
清水町
浦幌町
（至釧路市）
ばん馬
（帯広競馬場）
幕別町
芽室町
美生川
帯広・広尾自動車道
豊頃町
とかち帯広空港
帯広市
十勝川
カムイ
エクウチカウシ山
▲1,979m
▲十勝幌尻岳
1,846m
札内川
中札内村
更別村
大樹町
天馬街道
日高山脈襟裳国定公園
広尾町
十勝港
（至えりも町）
音調津
大樹
旭浜
大津
厚内
凡　例
〔高速自動車国道〕
供用区間
整備計画区間
〔一般国道自動車専用道路〕
供用区間
事業区間
計画区間
〔一般国道〕
供用区間
〔その他〕
市町村界
鉄道
一級河川
重要港湾
1種漁港
4種漁港
空港
北海道遺産

３　グラフで見る十勝農業（農産）

小麦作付面積（R2）

（農林水産省「作物統計」）

馬鈴しょ作付面積（R2）

（農林水産省「作物統計」）

大豆作付面積（R2）

（農林水産省「作物統計」）

小麦生産数量（R2）

（農林水産省「作物統計」）

馬鈴しょ生産数量（R2）

（農林水産省「作物統計」）

大豆生産数量（R2）

（農林水産省「作物統計」）

小豆作付面積（R2）

（農林水産省「特定作物調査等」）

いんげん作付面積（R2）

（農林水産省「特定作物調査等」）

てん菜作付面積（R2）

（農林水産省「作物統計」）

小豆生産数量（R2）

（農林水産省「特定作物調査等」）

いんげん生産数量（R2）

（農林水産省「特定作物調査等」）

てん菜生産数量（R2）

（農林水産省「作物統計」）

グラフで見る十勝農業（畜産）

乳用牛飼養経営体数（R2）

（2020年農林業センサス）

乳用牛飼養頭数（R2）

（2020年農林業センサス）

生乳生産量（R2年度）

（全国、全道は農林水産省「牛乳乳製品統計」
十勝はホクレン調べ受託乳量(4月～3月)）

肉用牛飼養経営体数（R2）

（2020年農林業センサス）

肉用牛飼養頭数（R2）

（2020年農林業センサス）

【題名：早起き】

令和２年度「とかち農業・農村フォトコンテスト　十勝の農村景観部門」準グランプリ賞受賞作品

４　十勝農業の概要

○ 沿　革

明治１６年（１８８３年）、依田勉三を中心とする「晩成社」が帯広に入植し、十勝の開拓が始まった。その後、明治２９年（１８９６年）の植民区画地の開放で府県から移住して来た人たちによって本格的な開拓が行われた。以来、寒冷な気象条件にありながらも近代技術の導入、排水改良等の土地基盤整備を進め、今日では、日本最大の食料供給基地として発展した。

恵まれた土地資源を活かし、大規模で機械化された生産性の高い農業が展開されており、１経営体当たりの経営耕地面積は45．７ｈａと都府県平均の約２１倍の規模になっている。

酪農家１戸当たり経産牛飼養頭数は、１２３頭で、ＥＵ諸国の水準に匹敵する規模である。

また、個人経営体に占める主業経営体の割合は、８７％と全国平均の２２％を大幅に上回り、農業所得を主とする経営が圧倒的に多い状況にある。

【題名：つかず離れず】
令和2年度とかち農業・農村フォトコンテスト
農業王国十勝の人部門入選作品

令和２年産農畜産物に係る十勝管内24農協の取扱高(概算)は、3,４５６億円となっており、取扱高に占める耕種部門の割合は37.8%、畜産部門が62.2%である。

耕種部門は、畑作物と野菜、畜産部門は生乳、肉用牛の生産が主になっており、地域的には帯広を中心とする中央部では耕種の比率が高く、山麓部や沿海地域では酪農・畜産主体の経営になっている。

【題名：光に導かれ】
令和2年度とかち農業・農村フォトコンテスト
十勝の農村景観部門入選作品

日本有数の農業地帯として発展してきたが、一方で、経営規模の拡大に伴う労働力不足や高齢化、後継者不足、また、食の安全・安心に対する消費者の関心の高まり、さらには市場のグローバル化が加速する中で、農業を取り巻く情勢は大きく変化している。

このような状況の中、十勝管内の生産者、農業関係機関・団体は、豊かな大地のもとで先人たちが築いた基盤をもとに、日本中の消費者に安全で高品質な食料を安定的に供給し、豊かな農村環境を維持していくための取組を進めている。

【題名：十勝で生まれ育って12年、まだまだ現役です。】
令和2年度とかち農業・農村フォトコンテスト
十勝の農村景観部門入選作品

５　十勝の自然（気象）

○ 気　象

十勝は北海道東部に位置し、西に日高山脈、北に大雪山系、南と東は太平洋に接する地理的状況にある。

夏季は比較的暖かく、令和2年には最高気温35.8℃を記録した。

冬季は寒冷高気圧（シベリア高気圧）により低温が続き、最低気温が－20℃を下回る日もあるなど寒さも厳しく、かつては－38.2℃（明治35年１月）を記録した。

年間の日照時間は北海道で最も長い。作物の生育期間の６月から９月にかけては曇天が続くことがあるため日照時間は短く、秋季の１０月から翌年４月にかけては晴天の日が多く長い。

年間の降水量は少ない。特に、冬季は日高山脈で雪雲が遮られることから、積雪が少ない傾向にあり、冬の寒さによる地下凍結が著しい。

内陸部と沿岸部では気象条件に差が見られる。沿岸部は濃霧が発生しやすく、気温は低く、降水量が多く日照時間は短い。

また、山麓部沿いの地域は内陸部より降水量が多い傾向にある。内陸部は、降雨が少なく日照時間は長く、積雪が少ない傾向にある。

このような気象条件から、内陸部は畑作主体の経営が多く、沿岸部や山麓部では酪農が多く営まれている。

月別気象経過（帯広）

	平均気温（℃）		日照時間（hr）		降水量（mm）	
	令和2年	平年	令和2年	平年	令和2年	平年
1月	-5.5	-6.9	196.8	188.2	37.0	40.5
2月	-4.9	-5.7	198.9	191.5	43.5	28.8
3月	1.4	-0.4	218.5	217.9	80.5	43.8
4月	5.4	6.0	174.1	192.9	94.0	60.1
5月	13.1	11.6	202.0	188.8	24.0	84.7
6月	16.8	15.2	116.0	148.2	57.5	81.1
7月	19.0	18.9	115.9	121.9	42.0	107.1
8月	22.0	20.3	169.7	125.2	111.5	141.3
9月	17.3	16.9	69.3	137.8	138.5	140.2
１０月	11.0	10.3	178.7	167.6	71.0	85.7
１１月	4.5	3.5	169.0	168.2	16.5	54.2
１２月	-3.2	-3.8	202.8	172.0	0.0	52.3
年合計(平均)	8.1	7.2	2,011.7	2,020.1	716.0	919.8

（帯広測候所調べ）

旬別平均気温（℃）

（札幌管区気象台、帯広測候所調べ）

月別降水量（mm）

（札幌管区気象台、帯広測候所調べ）

月別日照時間（hr）

（札幌管区気象台、帯広測候所調べ）

５　十勝の自然（土壌）

１ 十勝の地形

十勝の主たる地形は、十勝川とその支流域の低平地（沖積地）、河岸段丘（洪積地あるいは台地）、起伏の大きい丘陵地と分けられるが、十勝では特に段丘地形が発達しているのが特徴である。これらの地形条件に異なる母材（土壌の鉱物的な起源物）や水分環境に応じ、多様な特徴を持つ土壌が生成、分布している。

２ 火山性土

支笏カルデラ周辺、東大雪、雌阿寒岳等の火山から噴出した火山灰が十勝一円に降り積もり、厚い火山灰層を形成した。堆積している火山灰は新旧合わせて２０種類以上に及び、古くは１０万年前のものが見られる。

この火山灰を母材として生成した土壌が火山性土（黒ボク土）である。降灰後に繁茂した植生が枯死分解し生成した腐植が火山灰と強く結合し、真っ黒な腐植層を形成する。腐植層は微生物によって次第に分解され褐色となるが、集水地形や下層堅密で排水が悪いような条件では分解が進まず腐植層が厚いまま残されている。カシワ林はこのような所に多い。こうして十勝には、褐色と黒色の２種類の火山性土が混在し、「乾性」「湿性」の火山灰と呼び慣わされてきた。土壌分類上は、それぞれ淡色黒ボク土、腐植質黒ボク土とされ、特に排水不良な条件では多湿黒ボク土となる。

火山性土は、リン酸を吸着固定しやすい性質があり、また養分が少なく風害も生じやすい特徴がある。

厚層多腐植質黒ボク土の
土壌断面　（清水町）

（写真提供：道立中央農試　橋本 均 氏）

土壌と分布面積

（単位：ｈａ、％）

大まかな区分	土壌分類	面　　積	割　合
火山性土 (黒ボク土)	黒ボク土	82,685	32.2
	多湿黒ボク土 (黒ボクグライ土含む)	43,824	17.0
台地土 (洪積土)	褐色森林土	19,805	7.7
	灰色台地土 (グライ台地土含む)	14,038	5.5
低地土 (沖積土)	褐色低地土	61,411	23.9
	灰色低地土 (グライ土含む)	25,035	9.7
(泥炭土)	泥炭土	10,202	4.0
合　計		257,000	100.0

出典）橋本、志賀　北海道土壌一覧

５　十勝の自然（土壌）

３ 火山性土以外の台地、低地の土

降灰の少なかった十勝東北部の台地・丘陵地では、堅くてやや重粘な褐色森林土や灰色台地土が見られ、排水対策など物理的な改善対策が必要とされている。

一方、火山灰は低地にも堆積したが、水で流されたり氾濫で新たな土砂が堆積するので、土壌の母材にはなり難い。この様な低地では、川が運んできた粘土や砂を母材にした土壌が生成し、排水の善し悪しで褐色低地土、灰色低地土、グライ土に区分される。土層中に石礫の多いことも十勝の特徴である。

十勝川下流域の低湿地帯では、繁茂したヨシやハンノキなどが分解せず堆積し、泥炭層を形成した。こうした地帯でも排水改良が進められ、泥炭土として農地利用されているが、地下水位は高まりやすいのが問題点である。

４ 現在の土壌の姿とこれから

このように多様で問題点を抱えた十勝の土壌であるが、開拓以来130年に及ぶ先人の努力によって肥沃度の向上が図られてきた。同時に排水改良や火山灰層の反転、混合や客土、除礫といった土層改良も大規模に進められ、生産力向上の大きな原動力となった。

一方、近年の問題として、土壌病害回避のため土壌が酸性化する傾向にあること、営農の機械化進展に伴う作土直下の耕盤層形成、防風林の減少に伴う春の風害、傾斜地での土壌流亡等が挙げられる。また地域的には、家畜ふん尿等の局所的過剰施用や野菜作の増加に伴う過剰施肥による養分蓄積も指摘される。しかし、生産者のコスト・環境意識の向上、関係機関の努力、土壌診断の普及等によって、施肥管理や土壌管理の適正化が進められており、次代の農業生産を支える基盤として土壌機能を増進させる努力が続けられている。

十勝管内土壌分布図

６　十勝の農業のいとなみ（農業経営体数、農業就業人口）

○ 農業経営体数及び農業就業人口

農業経営体数は減少傾向にあり、令和２年には５，２６６経営体と平成７年の６１％となっている。

経営耕地面積規模別経営体数では、３０ｈａ以上が３，４９９経営体で全体の６６．４％を占めており、うち５０ｈａ以上は１，２３１経営体で全体の２３．４％を占めている。

また、農業経営体数のうち個人経営体（４，５１１経営体）を主副業別でみると主業農家が全体の８６．７％を占め、全道平均（７１．７％）の１．２倍となっており、主業農家が生産の大部分を担っている。

農業就業人口は減少傾向にあり、令和２年では、個人経営体の農業従事者数が１３，５１２人となっている。

経営耕地面積規模別農家数

（単位：戸、％）

年　度	農業経営体数	5ha未満	5～10	10～20	20～30	30以上(30～50)	50以上(50～100)	100以上
平成７年	(100.0) 8,604	(9.0) 777	(7.5) 646	(19.0) 1,633	(29.9) 2,569	(29.8) 2,562	(4.8) 417	
平成12年	(100.0) 7,472	(8.1) 607	(5.9) 439	(15.2) 1,139	(25.8) 1,930	(35.6) 2,660	(9.3) 697	…
平成17年	(100.0) 6,596	(6.4) 421	(4.6) 305	(12.7) 835	(23.8) 1,568	(38.6) 2,546	(13.4) 886	(0.5) 35
平成22年	(100.0) 5,978	(5.4) 321	(3.0) 177	(10.7) 642	(21.6) 1,291	(41.1) 2,458	(17.4) 1,039	(0.8) 50
平成27年	(100.0) 5,843	(8.2) 477	(2.9) 169	(8.8) 513	(17.9) 1,044	(38.9) 2,274	(20.1) 1,174	(3.3) 192
令和2年	(100.0) 5,266	(8.1) 428	(2.6) 135	(7.1) 375	(15.7) 829	(38.9) 2,048	(23.4) 1,231	(4.2) 220

（農林業センサス）

農業就業人口及び基幹的農業従事者数の推移

（単位：人、％）

区　分		平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年
農業就業人口	総　数	(100.0) 24,603	(100.0) 22,083	(100.0) 20,094	(100.0) 18,234	(100.0) 16,375	(100.0) 13,512
	(%) 15～29歳	(9.7) 2,386	(9.8) 2,158	(9.7) 1,952	(9.5) 1,735	(8.6) 1,416	(6.7) 904
	(%) 30～59歳	(57.5) 14,155	(54.1) 11,956	(53.3) 10,705	(51.5) 9,396	(49.1) 8,038	(48.0) 6,492
	(%) 60歳以上	(32.8) 8,062	(36.1) 7,969	(37.0) 7,437	(39.0) 7,103	(42.3) 6,921	(45.3) 6,116
基幹的農業従事者数	総　数	(100.0) 21,747	(100.0) 19,698	(100.0) 17,782	(100.0) 16,517	(100.0) 15,142	(100.0) 12,323
	(%) 15～29歳	(7.9) 1,713	(6.9) 1,355	(7.6) 1,357	(7.6) 1,250	(6.8) 1,026	(5.1) 629
	(%) 30～59歳	(63.4) 13,789	(58.9) 11,595	(58.4) 10,376	(54.3) 8,971	(50.8) 7,692	(49.7) 6,130
	(%) 60歳以上	(28.7) 6,245	(34.3) 6,748	(34.0) 6,049	(38.1) 6,296	(42.4) 6,424	(45.2) 5,564

※　令和２年の農業就業人口については、個人経営体の農業従事者数。　（農林業センサス）

６　十勝の農業のいとなみ（耕地）

○ 耕　地

耕地面積は、平成元年の２６万１，０００ｈａを境に減少に転じ、令和２年では２５万４，６００ｈａとなっている。

１経営体当たりの経営耕地面積は令和２年で４５．７ｈａと全道平均の１．５倍、都府県平均の２０．８倍となっている。

耕地面積の推移

（単位：ｈａ）

区　　分	耕地面積	田	畑	普通畑	樹園地	牧草地	農業経営体数（販売農家数）	１経営体当たり経営耕地面積
平成　２年	260,700	2,150	258,600	183,400	109	75,000	9,880	22.0
平成　７年	260,500	1,880	258,600	176,500	119	82,000	8,604	25.1
平成１２年	258,800	896	257,900	175,400	107	82,400	7,472	28.7
平成１７年	256,200	819	255,400	172,000	91	83,300	6,596	32.1
平成２２年	255,200	817	254,300	—	—	—	5,978	35.2
平成２７年	254,900	761	254,100	—	—	—	5,655	41.6
平成２８年	254,900	761	254,100	—	—	—	—	—
平成２９年	254,600	761	253,900	—	—	—	—	—
平成３０年	254,700	761	253,900	—	—	—	—	—
令和元年	254,700	761	253,900	—	—	—	—	—
令和２年	254,600	761	253,900	—	—	—	5,266	45.7
構成比（%）	100.0	0.3	99.7	—	—	—	—	—
令和２年全道	1,143,000	222,000	921,400	—	—	—	—	—
全道に占める十勝の割合(%)	22.3	0.3	27.6	—	—	—	—	—

注）ラウンドの関係で合計は必ずしも一致しない
耕地面積は、平成元年から平成17年は農林水産省「耕地面積調査」、平成19年以降は農林水産省「耕地及び作付面積調」
農業経営体数（販売農家戸数）は農林業センサス
１経営体当たり経営耕地面積は、農林業センサスの販売農家の「経営耕地総面積」÷「経営耕地のある販売農家数」で算出、

【題名：光のライン】
令和2年度とかち農業・農村フォトコンテスト
十勝の農村景観部門入選作品

６　十勝の農業のいとなみ（担い手）

１ 認定農業者

認定農業者は、農業者の自主的な経営改善を目的に農業経営基盤強化促進法に基づき、市町村等から「農業経営改善計画」（５年後の経営目標）の認定を受けた農業者で、地域農業の担い手に位置づけられる。

十勝では、販売農家の約９０％が認定を受けている。

認定農業者の推移

（単位：経営体）

区　分	平成２８年	平成２９年	平成３０年	平成３１年	令和２年	令和３年
全　道	31,056	30,497	30,146	29,741	28,978	28,369
十　勝	5,346	5,259	5,223	5,178	5,103	4,973

（各年3月31日現在　十勝総合振興局調べ）

２ 新規就農者

十勝の新規就農者は年間１００名前後で推移しており、全道は約１５％を占めている。農家出身で学校卒業後直ちに、または、卒業後に研修を経て就農した新規学卒者の割合が多い。

十勝管内における新規就農者数の推移

（単位：人）

年　　度	平成２７年	平成２８年	平成２９年	平成30年	平成３１年	令和２年
全　道	589	566	569	529	454	474
十　勝	84	93	98	82	72	106
うち新規学卒者	41	39	49	47	32	48
うちUﾀｰﾝ就農者	34	42	41	27	27	50
うち新規参入者	9	12	7	8	13	8

（十勝総合振興局調べ）

※　新規学卒者とは、農家子弟で学校を卒業後直ちに、又は卒業後に研修を経て就農した者。
　　Uターン就農者とは、農家子弟で他産業に従事した後、就農した者。
　　新規参入者とは、農家子弟以外、農家子弟でも自ら農地の取得を行い新たに就農した者。

３ 指導農業士・農業士

北海道では、次代の農業の担い手として意欲と能力を有する者に対する育成指導や地域農業の振興等に対する助言、協力を行う優れた農業者を「北海道指導農業士」として認定しており、十勝管内で８６名が認定されている。

また、地域農業の担い手として経営改善や地域農業の振興などに積極的に参加協力を行う意欲旺盛な農業者を「北海道農業士」として認定しており、２５３名が認定されている。

北海道指導農業士・農業士（十勝管内認定者数）

（単位：人）

年　　度	平成１５年	平成２０年	平成２５年	平成２９年	平成30年	平成31年	令和２年度
指導農業士認定者数	47	60	64	72	71	83	86
うち新規認定者	13	15	1	3	1	12	4
農業士認定者数	218	225	230	241	248	252	253
うち新規認定者	40	16	4	5	8	9	6

（十勝総合振興局調べ）

※　健康上の理由により認定を解除したもの、農業士だった者で指導農業士に認定したものを除いているため、計が一致しない。

６　十勝の農業のいとなみ（担い手）

４ 農地所有適格法人

全道の農地所有適格法人数は、増加傾向にある。令和２年には3,716法人となっており、十勝管内の農地所有適格法人数の占める割合は15%を超えている。

近年、大規模法人化の動きも見られるが、1戸1法人（家族経営型）の占める割合が多い。

農地所有適格法人数の推移　（単位：件・%）

区　分		平成２７年	平成２８年	平成２９年	平成３０年	平成３１年	令和２年
全　道		2,928	3,045	3,302	3,472	3,605	3,716
十　勝		459	477	530	572	590	594
	１戸１法人	331	341	377	416	436	440
	上記の割合	72.1%	71.5%	71.1%	72.7%	73.9%	74.1%

（十勝総合振興局調べ）

５ 農作業支援組織（コントラクター・ＴＭＲセンター※・酪農ヘルパー利用組合）

経営規模の拡大に伴う労働力不足解消が重要な課題となる中、農作業支援組織であるコントラクター、ＴＭＲセンター及び酪農ヘルパー利用組合に対する期待が高まっている。

※　ＴＭＲセンター：ＴＭＲ（牛などの家畜が必要とする養分要求量に合うよう粗飼料と濃厚飼料を適切な割合で混合し、ミネラル等が配合されている飼料）の調整・運搬のほか、草地管理や自給飼料の共同調整・貯蔵などを行う組織。

コントラクター・TMRセンター組織数の推移　（単位：組織）

区　分		平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
コントラクター	全道	330	324	326	330	335
	十勝	31	31	34	35	35
TMRセンター	全道	65	71	77	80	83
	十勝	13	14	14	14	16

※　コントラクター組織とTMRセンター組織の一部は、重複している。調査年度に回答がない場合もある。　（十勝総合振興局調べ）

組織形態別コントラクター組織（令和元年度）　（単位：組織）

区　分	農　協	株式会社	特例有限会　社	農事組合法　人	営農集団	その他	合　計
全　道	27	57	56	12	104	33	289
十　勝	6	9	8	2	0	0	25

※　全道の計は有効回答があった２８９組織に限る。　（十勝総合振興局調べ）

酪農ヘルパー利用状況

区　分		組織数（ａ）	利用組合の活動範囲内戸数（ｂ）	利用農家戸数（ｃ）	利用回数実績（ｄ）			利用日数実績（ｅ）	
					計	通常利用	連続利用	総利用日数	1戸当り利用日数
全　道		90	6,081	5,507	211,184	156,444	54,740	105,820	22.0
十　勝		17	1,293	1,154	40,251	28,311	11,940	20,215	19.9
	全道に占める割合	18.9%	21.3%	21.0%	19.1%	18.1%	21.8%	19.1%	-

※　a, b, c の値は、平成26年8月１日現在。d, e の値は平成26年度実績。　（一般社団法人　酪農ヘルパー全国協会調べ）

７　農協取扱高

○ 農畜産物に係る農協取扱高

平成１９年産農畜産物に係る農業産出額から従来の振興局（支庁）毎の公表が見直され、全国と都道府県毎の公表となったため、農業関係団体の協力を得て、平成２０年産農畜産物から、十勝管内２４農業協同組合が各々試算した農協取扱高を集計することとした。

なお、農協取扱高には商系取引高を含んでいないため、従来の農業産出額とは異なる。

農協取扱高には、直接支払交付金、生乳生産者補給金を含むが、産地交付金、農業共済金支払額は含まない。

令和２年産の十勝管内農協取扱高（概算）は、耕種部門では、４～６月にかけて干ばつ傾向であったが、気温・日照時間は確保され、生育は概ね順調に進んだ。その後、降雨と日照が極端な周期で経過したことから、農作物全般で収量及び品質に影響するとともに、コロナ禍により価格に影響を与えたことから、令和元年産に比べて９３億円減の１，３０８億円となった。

畜産部門では、酪農は、１年を通して前年を上回る生乳生産を維持するとともに、乳価が上昇する一方、個体販売額がやや下回ったことから前年比６％増、肉用牛は、枝肉価格や素牛取引価格が下落したことから、前年比１０％減となり、令和元年産と同じ2，１４８億円となった。

耕種と畜産を合わせた全体では、令和元年産に比べて９３億円減の３，４５６億円となった。

農協取扱高の推移

（単位：億円）

区分		農協取扱高					
		平成27年（概算値）	平成28年（概算値）	平成29年（概算値）	平成30年（概算値）	令和元年（概算値）	令和２年（概算値）
耕種	麦類	408	162	379	281	372	328
	雑穀・豆類	183	109	200	186	236	195
	ばれいしょ	265	241	280	259	272	269
	てんさい	311	225	332	306	288	276
	野菜	235	206	195	232	227	235
	その他	7	5	6	5	6	5
	固定払	-	-	-	-	-	-
	小計	1,409	948	1,392	1,269	1,401	1,308
畜産	酪農	1,148	1,212	1,244	1,285	1,327	1,403
	生乳	988	1,029	1,042	1,093	1,143	1,221
	肉用牛	634	721	720	736	790	713
	豚・鶏	17	16	16	15	15	16
	その他	25	26	16	15	16	16
	小計	1,824	1,975	1,996	2,051	2,148	2,148
総合計		3,233	2,923	3,388	3,320	3,549	3,456

（十勝地区農業協同組合長会、十勝農業協同組合連合会、十勝総合振興局産業振興部調べ）